

日本結核病学会東海支部学会

—— 第125回総会演説抄録 ——

平成27年6月13・14日 於 名古屋市中小企業振興会館（名古屋市）

（第107回日本呼吸器学会東海地方学会 と合同開催
第10回日本サルコイドーシス/肉芽腫
性疾患学会中部支部会）

会 長 小 川 賢 二（国立病院機構東名古屋病院呼吸器内科）

—— 一 般 演 題 ——

1. 夜間症状の残存する成人気管支喘息にチオトロピウムの追加投与が有効であった1症例 °森 秀法（羽島市民病呼吸器内）内藤順子・渡邊康司・下條 隆・大角幸男（同循環器内）

症例は72歳女性。罹患歴20年以上のアトピー型喘息（最重症持続型）で通院中。高用量のICS/LABA, LTRAを併用していた。睡眠中の喘鳴症状が頻回に見られ、しばしば経口ステロイドの全身投与を行っていた。チオトロピウム5 μ g/dayの追加投与により、一秒量改善と夜間症状低減が得られた。使用薬剤種類の増加を抑えたまま治療強化が可能であった。

2. 誤嚥性肺炎による急性呼吸促迫症候群を発症し、肺結核の診断が遅れた2例 °中尾心人・曾根一輝・

鈴木悠斗・香川友祐・黒川良太・佐藤英文・村松秀樹（JA愛知厚生連海南病呼吸器内）

症例は85歳と92歳の女性。いずれも発熱およびSpO₂低下を指摘され救急外来へ搬送。低酸素血症と両側肺びまん性浸潤影を指摘。嚥下機能低下を認め、心機能正常であったことから、誤嚥性肺炎に伴う急性呼吸促迫症候群と診断され入院。PIPC/TAZやMEPMによる治療で軽快退院となったが、後に入院時の痰抗酸菌培養陽性が判明。培養株の結核菌PCRが陽性であり、抗結核治療を要した。高齢者医療において誤嚥性肺炎として初期対応され肺結核の診断が遅れる症例が問題となっている。教訓的症例と思われ報告する。